Ⅳ まとめ

今回の発掘調査によって、朱雀大路と東側溝および、東築地基底部などの一部を検出した。しかし、朱雀大路の詳細については、これまでの数回の調査資料を加えても、まだ充分とは云えず、今後の調査件数の増加にまたねばならないが、現時点でのデータを整理して、将来の朱雀大路復原計画のための基礎資料としたい。

大路幅　六条一坊における大路幅員は路肩幅で約67m、溝心々間73.4～74m。六条一坊の坊垣築地は検出されていない。六条附近での畦畔の間隔を測ると約90m＝30丈、両側溝との位置関係は畦畔心から溝心まで８ｍ余りである。この値は羅城門北辺での朱雀大路西側溝と築垣の間隔と一致するから、畦畔は築地の痕跡を示すものとみなすことができる。

いっぽう、朱雀門の南方両脇における両側溝から大路幅を計測すると、路肩幅で70.95m＝240尺、溝心々間74ｍ＝250尺である。六条一坊での大路幅と比較すると、溝心々間距離は同寸法と認められるが、溝幅が六条一坊では朱雀門南辺の２倍に広がり、その分だけ路肩幅が狭くなっている。

朱雀門南辺の大路幅に、今回の調査で得た坊垣築地と東側溝との関係を当てはめて、築地心々間距離を求めると、築地・側溝間心々距離が約4.5m＝15尺であるから、築地心々間距離は280尺となる。この値は、延喜式京程の寸法と一致するが、延喜式京程の側溝心々間幅239尺、路肩幅234尺は平城京朱雀大路幅より狭い。

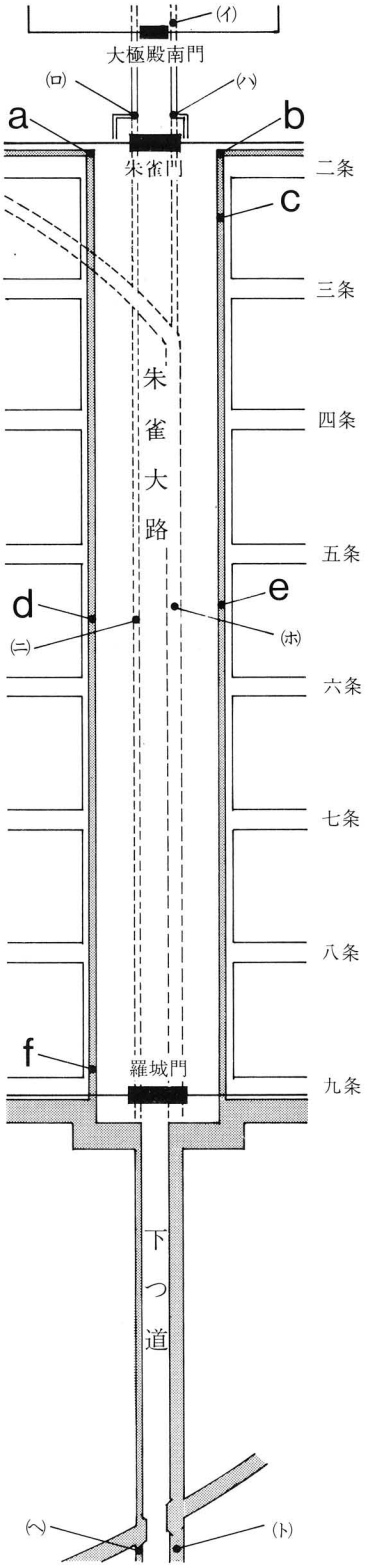
遺存地割をあたってみると、280尺幅の遺存地割は三条一坊のみで、三条大路から南は羅城門まで、ほぼ300尺幅で一定の間隔を保っている。すなわち、宮域に面した一坊分の坊垣だけが、朱雀大路に面して張り出したような格好になり、側溝との関係だけではなく、宮域に近接した特別な性格を意味するものとも考えられる。

朱雀大路の振れ　これまで、朱雀大路の振れは朱雀門の中心と、六条朱雀大路心の振れ（国土方眼座標系による北偏西0°15′50″）および六条朱雀大路西側溝と羅城門北辺西側溝の振れ（同0°14′42″）によって求めてきたが、朱雀門南辺の東・西側溝と今回の東側溝の調査によって更に精度の高いデータを得ることができた。

六条一坊朱雀大路西側溝と朱雀門南辺西側溝間の振れは北偏西0°15′15″、六条一坊朱雀大路東側溝と朱雀門南辺東側溝間の振れは0°14′42″である。この東側溝の振れは、羅城門と六条一坊間の西側溝の振れと一致する。

朱雀門心と、朱雀門南辺の朱雀大路東・西側溝間中軸線とのずれを測ると、朱雀門心の方が中軸線より80cm程西に寄っている。

宮城南面に開く門は、朱雀門を中央にして、東に壬生門、西に若犬養門を配し、それぞれ900尺の間隔を置き、二条大路に面して建つ。発掘遺構によって朱雀門からの心々距離を測ると、朱雀門～壬生門間＝267.76m、朱雀門～若犬養門間＝266.17ｍで、約1.6ｍの



朱雀大路		X	Y
a	西側溝	−146,009.86	−018,622.5
b	東側溝	−146,008.03	−018,545.5
c	東側溝	−146,255.7	−018,547.7
d	西側溝	−147,854.0	−018,614.25
e	東側溝	−147,797.0	−018,540.85
f	西側溝	−149,719.2	−018,606.34

下つ道		X	Y
(イ)	東側溝	−145,434.13	−018,548.04
(ロ)	西側溝	−145,948.0	−018,598.49
(ハ)	東側溝	−145,948.0	−018,575.69
(ニ)	西側溝	−147,870.0	−018,588.40
(ホ)	東側溝	−147,797.0	−018,565.0
(ヘ)	西側溝	−151,675,0	−018,571.5
(ト)	東側溝	−151,675.0	−018,547.2

朱雀門	−145,994.5	−018,586.3
若犬養門	−145,994.9	−018,852.5
壬生門	−145,994.1	−018,318.6

fig.17　朱雀大路・下っ道発掘調査位置と国土座標

差を生じている。すなわち、壬生門と若犬養門間の中心から、朱雀門心は約80cm西に寄っており、朱雀大路側溝間中軸からのずれと一致する。すなわち、壬生門、若犬養門は朱雀大路中軸を基準にして東西に振り分けられたものと考えられる。したがって、京の造営方位は朱雀大路側溝中軸を基準として設定されたとするのが妥当である。

下ツ道　下ツ道の遺構は、平城宮第一次大極殿南門（平城宮跡第77次調査）、平城宮朱雀門（同第16・17次調査）、六条一坊朱雀大路（昭和48年、奈良市）、稗田・若槻遺跡（昭和55年、奈良県橿原考古学研究所）の各調査で発見されている。これらのうち、大極殿南門の調査では東側溝のみを確認し、他はいずれも両側溝を検出している。

下ツ道の幅員は、側溝心々間で朱雀門北辺22.8m、六条一坊23.4m、稗田24.3mであり、南に下るほど広くなるが、路肩幅を測ると、それぞれ21.0m、16.9m、16.0mと逆に狭くなっている。これは下流ほど溝幅が広くなるために採られた方法で、この巧妙な地割技法は高度な土木技術を窺わせる。

西側溝の溝幅は、朱雀門北辺2.4m、六条一坊2.75m、稗田3.7m。東側溝の溝幅は、大極殿南門2.3m、朱雀門北辺2.4m、六条一坊11.3m、稗田11.0mである。六条一坊と稗田の東側溝は、その幅や深さ（1.5～2.0m）からみて人工の堀川、運河とみなすべきもので、下ツ道の東に沿って藤原京まで続いているものと考えられる。

この堀川の北端は、六条一坊から朱雀門までの間に右折、または左折しており、左折して旧秋篠川に、右折して佐保川や菰川の旧流路につながり、それぞれを給水源としていたものと考えられよう。稗田では、下ツ道を斜断する旧河川が検出され、東北方の地蔵院川の分流または本流が稗田で下ツ道の堀川と交叉して給水源となっている。

下ツ道の地割は、東側溝の堀川幅を含む約30m幅の水田として、稗田町から二階堂町まで断続して残され、二階堂から今里にいたる街道を経て、八尾からは南方に直進する寺川・米川が堀川の流路を踏襲している。米川は耳成山の北西で東に折れて、堀川痕跡は途切れるが、堀川はさらに南に延びて飛鳥川に連なるものと思われる。

下ツ道の振れ　発掘遺構によって下ツ道の国土座標系による方位の振れ（北偏西）を求めると、稗田～六条一坊間では、西側溝0°15′16″、東側溝0°15′20″、中軸線0°15′18″。六条一坊～朱雀門北辺間では西側溝0°18′03″、東側溝0°19′55″、中軸線0°18′59″。朱雀門北辺～大極殿南門間は東側溝0°15′39″である。

寺川から米川にかけての南北直線流路は約4.8kmの長さに及び、その振れは0°36′22″。この南北流路北端と、稗田の旧堀川を結ぶ直線の振れは0°09′35″である。南北流路の振れはやや大きいが、周辺の条里の方位ともほぼ一致して、下ツ道堀川の遺構とみても差支えないと思われる。橿原市八木の下ツ道遺存地割と朱雀門北の下ツ道中軸を結ぶ方位の振れは0°17′25″であるから、この振れの平均値を軸として、下ツ道は場所により方位を異にしていたことが分る。

なお、寺川・米川の南北流路の方位が強く振れているのは、東南から北西方向への等高

の地勢が影響しているものと思われる。

朱雀大路と下ツ道　六条一坊と朱雀門近辺での朱雀大路と下ツ道の中軸線のずれを測ると、下ツ道中軸を基線にして朱雀大路中軸は、六条一坊では西0.85m、朱雀門近辺では東1.6mの位置にあって、両中軸線は朱雀門～六条間で交叉していることが分る。

朱雀門の位置は、前記のように朱雀大路中軸より約80cm西にずれているが、これは下ツ道中軸と朱雀大路中軸とのちょうど中間にあたる。つまり、朱雀門の大路に対する位置のずれは、単なる施工ミスによるものではなく、旧下ツ道の影響を受けたものと考えられ、壬生門、若犬養門が正確に条坊基準線上に設定されているのは、朱雀門よりも着手時期が遅れたためであろう。また、朱雀門内に入って、第一次朝堂、第一次大極殿南門にいたる宮内道路は下ツ道をそのまま利用したものであり、この道が朱雀門中軸線より西にずれるのもこのような理由に依る。

朱雀大路の造営に際して、下ツ道の堀川は埋立てられ、秋篠川は西に移されて平城京西堀川として再生する。

朱雀門が下ツ道の影響を受けたために、朱雀大路の条坊基準線からずれたとすれば、下ツ道は、平城京の造営初期には藤原京からの資材運搬用の運河として最大限に利用したことは想像に難くない。とくに宮域の造営を急いだことは記録にもみえ、藤原宮使用殿舎を解体し、平城宮近辺まで運河を利用して移送し、大極殿や朱雀門が完成して、宮城は仮囲いのまま乍らも、一応の体裁を整えて、和銅3年に新都が発足する。

以上の考察は、これまでの数少ない発掘調査資料を基にしてまとめたために、推論の域を出ない点が多々あり、朱雀大路復原計画にあたっての一つの指針を示したにすぎず、今後の調査に期待するところが大きい。

参　考　文　献

1. 『平城京羅城門跡発掘調査報告』（第一次～第三次発掘調査報告）大和郡山市　1972年3月
2. 『平城京の復原保存計画に関する調査研究』奈良市　1972年
3. 『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市　1974年3月
4. 「南面大垣－朱雀門東－の調査」『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所　1982年3月
5. 「南面大垣－朱雀門西－の調査」『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
   同　　上　　1983年5月